

本年の飼料計画から見て 重点的に取上げる飼料作物は何か

先ず飼料作物の再認識……

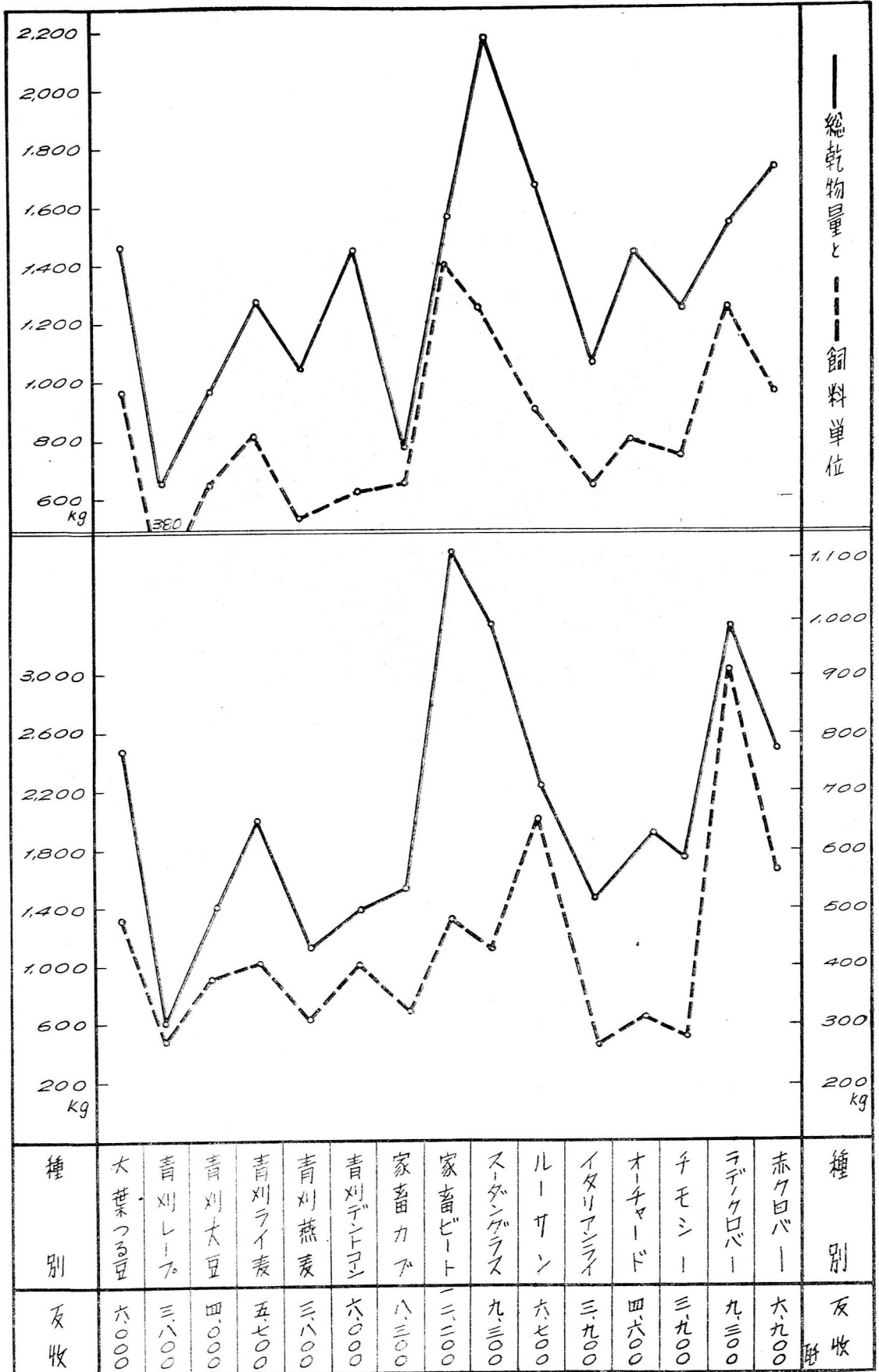
飼料作物就中牧草は、日本の国土経営、食糧問題の解決、自立経済の達成という見地から見て、これほど大切な作物はない。日本の農地が国土の一四〇％に過ぎないことは穀栽培偏重の農作が行詰つたことを物語る証左に他ならず、しかもこの行詰りを打開して国土の生産性を増加するには、牧草類を中核とした酪農の発展に俟たねばならぬことは今更多言を要しない。牧草ほど日本中どこでも栽培が容易で、その生産性の高いものはない。

即ち森林経営の限界を越えて草生限界が高地に及ぶことを考へても山岳、高原地帯の多い日本の国土では、これらの未墾地に適する草作の進展を期すべきである。また草作という不稔性は穀栽培不適地においてもその栽培が可能であるという特色を十分に活用すべきである。更にまた日本は既耕地、未耕地を問わず、泥炭地、湿田、火山灰地、酸性土壌、重粘土、礫土等の広大な特殊土壌地帯があれば、河川堤防、海岸砂丘地、畦畔に至るまで農地乃至は草生利用の立地条件が極めて多彩であるが、これらの如何なる地帯の酪農経営、または農地開拓においても、「くさ」の本質を理解し、適地適産の姿で草生を培養するならば日本の酪農も必ずや急進展することは疑う余地がないものと信ずる。

日本の酪農が単に乳価高によつて伸びるかの如き印象を与え、一時的に酪農ブームを現出したが、一歳を出でずしてその悪夢は打破られ、酪農家は今や酪農恐慌寸前の恐怖におのっている。日本の酪農はブームと恐慌の歴史の変遷に過ぎないという感がする。先進諸国の例に見る如く、「くさ」を基調にした酪農でなければ、永遠の発展は望めない。未開発地は「くさ」を中心に開拓を推進し、未利用地の悪草は、速やかに良草化し、山野溪谷至るところ青々とした飼料基地として、あり余る飼料資源の上に立つてこそ、酪農は安定するのである。

今こそ酪農を営む農民は勿論、官民挙げて飼料作物就中「くさ」を再認識して高度にその利用を図る方を樹立すべきである。

次に主なる飼料作物についてその反当生産量から見た飼料価値を、尠あるいは麦様の飼料価値に換算し、且つその換算量から見て反当の生産を金額にて表示して参考供したる。



蛋白質量による変換算量(胚)

飼料単位による変換算量(胚)

—— 総乾物量と
- - - 飼料単位

—— 飼料単位による変換算量(胚)

